



旧市街地からブラハ城を望む。ボヘミアを統一したプジェミスル家によって建てられたブラハ城。一時はオーストリアのハプスブルグ家の支配下となり、後にチェコスロバキアとして独立し、1993年チェコ共和国が誕生するまでの1000年の歴史を見つめてきた城である。

チェコビーズの里へ

取材/文 水野久美子(ビーズワーク研究家)

いまや、ビーズアクセサリーになくはないといっても過言ではないチェコビーズ。その故郷は、数奇な運命をたどってきた国、現在のチェコ共和国です。昨年チェコを旅してこられたビーズワーク研究家の水野久美子さんに、その原点をレポートしていただきました。



市民会館メタナホール 「ブラハの春音楽祭」の会場であり、一年中オペラやコンサートなどが開かれている。 ※「のだめカンタービレ」で、「千秋先輩」が出演した指揮者コンクールの会場。



ブラハ市街にて(中央が水野さん) クリスタルショップが軒を連ね、精巧なボヘミアンガラスで作られた食器やアクセサリーが、クラシックなデザインから現代的でおしゃれなデザインまで豊富に揃っている。



旧市街広場 ロマネスク・ゴシック・ルネッサンス・バロック・アールヌーヴォー・アールデコ・キュービズムと各時代の古い建物が残っており「建築博物館の都」とも呼ばれる。ブラハは1992年世界遺産として登録された



丘の上から眺めたブラハ市街 ブラハ城のあるヴィシェフラドの丘から眺めたブラハ市街。ヴルタヴァ川の東が至り中世の街間にそのままの旧市街が広がる。

ブラハ

世界で一番美しい古都といわれるブラハは、私の憧れの街。丘の上にそびえ建つ、千年の歴史を持つブラハ城。旧市街には中世の街並みがそのまま広がる。レンガ色の屋根と白い壁で整えられた街のあちこちから、いくつもの美しい尖塔が突き出し、「百塔の都」「百塔の街」と呼ばれている。モーツァルトをはじめたくさんの音楽家を育て、「ヨーロッパの音楽院」とも呼ばれる街だ。

チェコビーズ

チェコ共和国の西部に広がる地方を「ボヘミア」と言い、ガラスやインテリアなどのガラス製品が「ボヘミアンガラス」と呼ばれて有名ことから、「ボヘミアンビーズ」とも呼ばれる。チェコビーズといえは、ファイアーポリッシュとプレスビーズが代表的。ファイアーポリッシュとは、カット加工したガラスビーズの表面を熱し、丸みと艶を出したビーズで、スワロフスキー社のクリスタルビーズと並ぶ美しさを誇っており、ビーズアクセサリーではよく使われるビーズの一つ。プレスビーズとは、様々な形の金型にガラスを溶かして成型されたビーズで、その種類は膨大な数がある。

ヤプロネク

ブラハから車で1時間いくと、なだらかな丘が続く田園風景の中に、小さなビーズ工場が点在する。ここが、チェコビーズの生産地、ヤプロネク地方。チェコビーズというと、よく聞く名前がヤプロネクス(JABLOŇNEK)社。これをチェコのビーズメーカーの名前と思っていた人は多いが、ヤプロネクス社はチェコで作られたビーズの輸出を行っている会社である。社会主義体制下では、各ビーズ工場で作られた製品はすべて国に買い取られてから流通していた。ヤプロネク地方のビーズ工場を統括していた政府の機関が、ヤプロネクス社。共

和国となり、自由主義体制となつてからも、小さな工場のビーズは引き続きヤプロネクス社を通じて世界へ送り出されている。

ブラハ・スカニーヤ

社会主義体制の時代、チェコの代表的産業であるガラス産業は国によって統制されており、小さな工場などは個々に単独で経営を行うことができなかった。国の方針によって運営することができたいくつかの企業に吸収されていた。その中で100年の歴史と技術を有するのが、最大手のスカニーヤ社である。作業工程によって工場が細かく分かれていて、当時、大小1000あまりの工場をまとめていたそうである。現在でも、チェコのビーズメーカーとしては最も大きく、全世界へチェコビーズを供給している。

ブラハ・スカニーヤのオフィス

スカニーヤ社のオフィスは街中にあり、中世の都市のような街並みにふさわしい、クラシカルな建物。中は高い天井と大きなドアという造りで、会社の歴史を感じさせる。デザイナーたちが働くアトリエでは、まだ市場に出していない珍しいビーズが試作されたり、アクセサリ商品として完成品が作られている。ショールームでは、現在販売されているビーズを使ったアクセサリがたくさん展示してあるが、その奥の事務所に置かれていた、ビーズの形見本は圧巻。カードに張られたビーズのサンプルの数は膨大で、およそ5000種類といわれている。今では生産がストップしている貴重な形もあり、思わず、「この形のビーズがいまあれば」と思ってしまう。

スカニーヤ社の工場

オフィスから車でさらに10分行った郊外に工場がある。中を見せてもらったのはメインの工場。一番驚いたのはプレスビーズを金型で作る工程で、まるで



スカニーヤ社オフィス前 チェコ語で書かれた会社名「SKLENĚNÁ BIŽUTERIE」の看板が見える。チェコでは家族と過ごす時間を大切にしているということで、事務所の労働時間は7時から2時までが厳格に守られている。

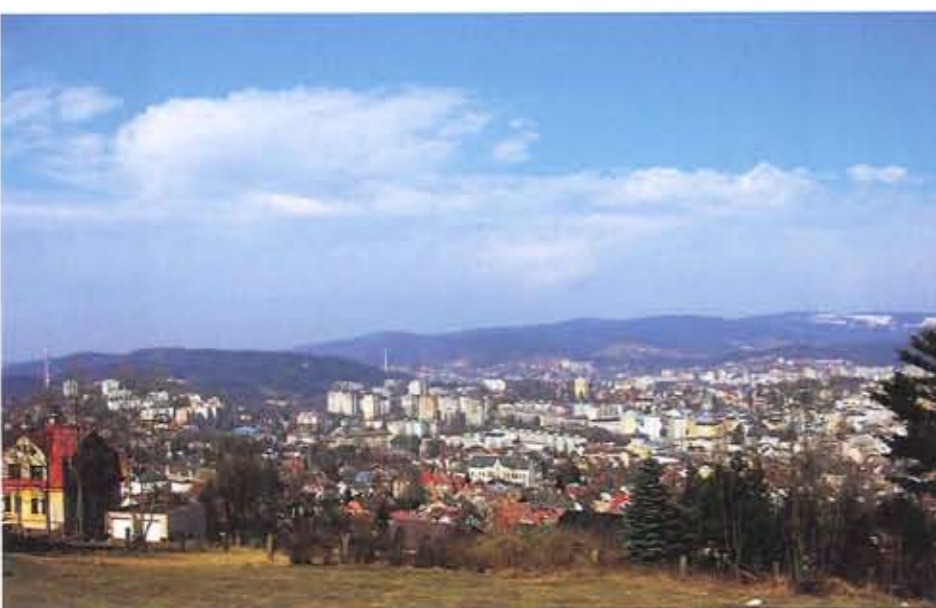


工場にて 水と化学薬品と砂を混ぜてタンブルに入れ、回転させてビーズを研磨し、つるつるに磨く。大きいビーズはゆっくりと、小さいビーズは早く回すそうである。



社長夫妻と ブラハ・スカニーヤ社の製造責任者である、ご主人のスターマンさんはチェコ系アメリカ人。奥様のキムさんはアメリカの販売会社の韓国系アメリカ人。

ヤプロネク地方、チェコのガラス産業を支えるきたヤプロネク地方の町並み。このどかな田園風景の中で、国を支えるガラス産業の技術が守り込まれてきた。



チェコビーズのいろいろ



Czech Beads

アメリカのビーズ作家たちは、チェコビーズをよく使う。その形の面白さを作品に上手に生かしている。コスチウムジュエリーのデザイナーのなかでも、抜群の人気を誇るミリアム・ハスケルも、このスカニーヤ社のビーズを使っている。ハスケルの作品の中で、面白い形だと思ったビーズが、スカニーヤ社の形見本の中にいくつもあった。単独で見るとどうやう使ってもいいか迷うような形のビーズが、ここにはこの形しかあり得ないという説得力でアクセサリに組み込まれていて、あらためて、ハスケルのデザイン力に感服する。プレスビーズの中でも、ハスケルが使用したものは「ハリウッドビーズ」と呼ばれている。6月にはハリウッドビーズの日本販売が予定されているので、他では見られない面白い形のビーズが、日本のビーズファンの手で素敵な作品としてお目見えする日も遠くないだろう。

ブラハ・スカニーヤのビーズ

鋼焼きを焼くように、金型にガラスを溶かし入れ、ビーズを1個ずつ手で作っている。この金型作りこそがプレスビーズの命で、スカニーヤ社では約3500種類の金型を所有しているそうである。そこからさらに、削ったり、磨いたり、表面に加工を施したりと、たくさんの工程を経て完成される。ビーズの色と加工を組み合わせたかなりたくさんの種類がある。その元となるガラス棒は別の工場で作られており、単色だけでなく、中には模様が入っているものもあり、気が遠くなるような種類のガラス棒が倉庫に眠っている。ファイアーポリッシュはプレスビーズよりさらに工程が多く、作業工程の中には、部外秘として見せてもらえない場所もあった。工場の廊下には、昔使っていたというファイアーポリッシュをカットする古い機械が無造作に置いてあり、歴史の古さが感じられた。昔は手でビーズを回してカットしていたそうである。